いはゆる黑羖羸にして、膳夫錄に所謂骨羸なり、また背のみ黑くして、其餘は白色のものあり、此卽紹興本草に圖する處の羖羊也、これを證類本草には、全身白黑斑文のものに圖すれ共、恐らくは傳寫の誤りならん、

〔本草綱目譯義五十一獸〕山羊　和產不知

唐ニハ品類多シ、近來ミセ物ニスルウミムコト云者アリ、此ハ杜撰也、是ハ馬ノ形ノ如シ、大サモ同ジ、頭ハ高ク細ク羊ノ如シ、甚臭氣アリ、額ノ眞中ニ大ナル角一ツアリ、高サ一寸ホド立、上ハ左右ニ分レ、ウシロヘマガル、一尺バカリ、牛角ホドノ大ニシテ、其角ヒツナリニシテマロカラズ、色クロシ、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十一年五月甲辰、新羅人李長行等、進羖羸羊二、白羊四、山羊一、鵞二、〔一本無二白羊三字〕

〔笈埃隨筆八〕雜說八十ケ條

薩摩大隅の犬は、すべて足短く、腹を地に摺て步む計也、又ヤギといふ獸あり、羊に似て色黑く毛長し、肥前長崎には取分多し、大隅には、此ヤギの牧有て多く育つ、其故は知らず、嘉栗曰、ヤギ野牛と書るが羊に似て甚臭し、

〔古今要覽稿禽獸〕さいのこま　綿羊

さいのこま一名らしやけんは、漢名を綿羊といひ、其大なるものを無角白大羊といふ、これまた夏羊の一種也、今官苑に蕃育せしは、凡百三四十頭もあり、そのうちにて大なるは、牝鹿の如く、小なるは犬の如し、すべて頭小さくして身大なり、毛至て細密にして、長さ二寸許もあり、その年を經ざるものは色潔白にして、年を經るものは、やゝ褐色を帶たり、又黑駁のものあり、眼邊及び口鼻並に淡紅色にて、口小さく鼻低し、喉下より胸に至りて長鬚あるは吳羊とおなじ、耳は橫に垂て前に向ふといへ共、後に向たるもあり、牝牡共に角なきは常なれども、たまゝ角を生ずるも